沖縄、済州、そしてインド太平洋

坂口　裕彦

5月31日～6月2日、韓国南部の済州（チェジュ）島で、「インド太平洋地域」をメインテーマに開催された「済州フォーラム」を取材した。2日の「持続可能な平和と繁栄のための地域外交」というセッションは、地元・済州道の呉怜勲（オヨンフン）知事や沖縄県の照屋義実副知事らが参加。会場は「満員御礼」で、立ち見も出るにぎわいだった。

沖縄県は今年4月、国際交流や経済交流をパワーアップさせるため「地域外交室」を新設した。地域の平和構築や持続的発展に貢献していくとしている。北京や上海、香港、台北、ソウル、シンガポールなどに県事務所を構える。こうした流れの中、長年、交流のある済州道からの要望に応える形で、セッションへの参加を決めたのだという。

興味深かったのは、照屋さんが講演で映し出した、沖縄を真ん中に据えた東アジアの地図だ。空路で4時間圏内に日本全国はもちろん、ソウルや北京、上海、台北、さらにはホーチミンやバンコクまですっぽりと収まっている。

照屋さんは「日本の他地域とは異なる独自の歴史がある。かつての琉球王国は近隣諸国との外交や交易を通じて、友好関係を結んだ。多様性に富んだ独特の文化を育み、それが今でも受け継がれています」と話していたが、地図を見たせいか、「なるほどなあ」と素直に感じた。

済州島も、地図の真ん中に置いてみると面白い。首都ソウルよりも福岡の方が近い。ソウルと上海は、ほぼ同じ距離に見える。

沖縄と済州島は、観光が主力産業。沖縄は1945年の沖縄戦で、済州島は米軍政下の48年4月3日、朝鮮半島が二つの国に分断されることに反対する島民蜂起を軍や警察が弾圧した「4・3事件」で、それぞれ多くの尊い人命が失われた。

セッションの後、照屋さんは呉知事と会談。済州道が呼びかける「グローバル平和都市連帯」に沖縄県が参加すると表明した。

もちろん、外交は各国政府が、交渉を通じて解決することが基本だ。でも、沖縄や済州道が地理的な優位性も生かしながら、この広大なインド太平洋で独自の存在感を発揮すべく動いていることは、前向きに評価していい。